

しかし、このころは、運動が好きだからやっていった程度であって、体育を一生の仕事としてやろうなどと考えてもいなかった。

女子青年会の、バレーボールチームを指導して、県大会で優勝、全国大会に出場した年、小学校の校長先生にすすめられて、教師として出発した。

そして、三十一年、いつも体育主任であった。

この道に入ってみると、その仕事がいかにやりがいがあり、素晴らしい仕事であるということがよく分り、これに魅力を感じるようになった。

今年の四月より、文部省指定「体力づくり」推進校の滑津小学校に勤務することになった。

三年継続研究の、一年目のスタートである。主題をどう設定し、どのようにして体力を高めたらよいか、先進校の模倣でない方法で、子どもたちの体力を高めることはできないだろうかと考え続けた。

しかし、二十年も前からはいままでの全国的、体力づくり推進校では考えられる、あらゆることを実践している。先生方と、なんども協議し、主題を『未来をひらく、心身ともにたくましい子どもの育成』とし、サブテーマに、『すすんで体力づくりにはげむ子ども』とした。

たくましく未来に生きる、子どもの育成は、現代の学校に課せられた課題である。

ある。

そこで、体力づくりをおして、子どもたちが現在ほもちろん、生涯にわたって、運動に親しみ、健康で明るく新しい社会を創造し、楽しい豊かな生活を営む能力と態度を身につけた、心身ともにたくましい、子どもの育成を願って主題を設定した。

そして、週一時間の「羽黒タイム」や、業間体育では、ジャズ体操を中心に実施し、柔軟で、パワーのある筋機能を向上させ、心のリラクゼーションをはかろうと考えた。

校内実技研修会では、ジャズ体操に全職員で挑戦した。その結果、全身運動を、より正確に、大きく、美しく行うためには、からだの各部位がよく動き、全体の動きに調和していなければならぬことを知った。

ジャズ体操のねらいである、「自分のからだを、自分で思うように動かすことができるようになる」に、ほど遠いことに驚き、子どもたちと、音楽に合わせて、腰を振り、脚を上げ、各部位を柔軟にしようとならばつてている。

那須の山々に夕焼雲が流れるころ、今日の体力づくりのしめくりに、羽黒の丘にある学校から、稲が黄金に実る農道を、あせかき地蔵までの往復二キロメートルを五・六年生全員で走る。教師と子ども、子ども同志が美しい心のきずなによって結ばれ、自己の

ペースで、励まし合いながら。そんなとき、私は、体力づくりも「人間つくり」だとしみじみ思う。

人間がまさに「人間である」ためには、からだど、心のつり合いのとれた成長がなければならぬ。からだの健康だけでなく、心の健康にも留意して「心身ともに健康な人間づくり」をめざしこれからも努力したい。

(中島村立滑津小学校教諭)

## 忙中模索

田部 絵津香



あったが、さすが五月の連休も過ぎるころになると、身を粉にしたわりに、仕事のできは稚拙で、生徒も思うように動いてくれないというジレンマに、深く落ち込むようになった。自己憐憫の心情が私を支配し、朝起きても学校に行きたくない、通勤途中に信号で止まるとうれしいという、全く情ない状態に陥ってしまったのだ。いつの間にか自分だけのことを考えるようになっていた。仕事を手際よく片付けて早く学校から解放されたい、自分の時間をもちたい。しかし、自分の時間と言ってもそれは、傷めた翼を愛撫するだけの惨めな時間に過ぎなかった。夏休みはもったいないことに、自分を甘やかすそんなことに時間を費やしてしまった。

安住の夏休みも終わって新学期が始まり、再び水面にもがく魚のような日々を送っていた時、相談を持ちかけた友人が、その先輩の話として、私を改心させ奮起させる話をしてくれた。

その先輩は在職四年目で、今でこそ余裕を見せているが、やはり一年目は苦渋の日々を送っていたそう。仕事の要領は得ない、生徒は新米だと甘く見て言うことを聞かない。今の私と全く同じである。教師ならこれはだれもが通る道なのかもしれない。その先輩がそんな状況を打開できたのは、「誠実さ」を捨てなかったからだと言っている。寝る時間を削って生徒

この四月、新採用となり、教科の外に一学年の学級を持つことになった。

教職に就いて痛感したことは、そのこなきなければならぬ仕事のなんと多いことかということだ。テンポの遅い私にとって、それは相当の苦痛で、体が三つくらいあればと思うことがよくある。着任したところは、その忙しさそのものに充実感を覚える毎日